

のようでした。あのときは一億火の玉総決起の時代だったが、大変な戦争をやったもんだ。隊の近くに精米所があったので、黒い玄米も白米になって助かった。

内地でも弱い兵隊がはいつてくるようになり、意志の弱い兵隊が列車に飛び込み自殺をした時は死体の始末をしたが、膝から切断、頭は小脳の部分が少し残っているだけ、股から白い骨がとびだしていた。近くの農家からかますを貰って担架にして肉片をレールのうえを歩いて拾って陸軍病院に運び、つなぎあわせて形をつくり、包帯でグルグル巻きにして復元し親を呼んで確認させた。

「あなたの息子さんの特徴は」

「へそにホクロがあります」

確かにへそにホクロがあった。

「私の子供です」

と引き取っていった。

―事後の取扱は戦死ですか。どうなりました。

まあ戦病死として処理しました。もう一つの例は、便所でゴボー剣で首のノドを切ったが急所をはずしたので

血だらけの中で血文字で

「コレデイキラレマスカ」

と書いてあったのにはあきれましたね。切り口がパツクリあいてだき起こすと首がガックリうしろへちぎれるかと思いましたが。陸軍病院へ急送したが、どうなりましたか知りませんが。

増城では砲弾でやられ大腿部がグチャグチャとザクロのようになっているのを切断するのに麻酔薬がきかず、痛い痛い泣くのを鋸で骨を切り、切り口をまんじゅうを作るときのようにしぼり手当をするんですが、衛生兵をやっているといろんな傷の手当てをやりました。

## 大隊本部の苦悩

福島県 斉藤 榮

―斉藤さんの簡単な軍歴をどうぞ。

こまかいことは記憶にありませんが、おもなことを申し上げます。

昭和十七年九月に新潟県の村松連隊に入隊、みっちり  
と初年兵教育を受けました。初年兵教育の思い出といえ  
ばどこでも同じでしょうが、ビンタ、員数あわせ、空腹、  
非常呼集等につきるでしょうね。

三か月の初年兵教育を終え、千葉県の佐倉連隊に転属  
になりました。転属といっても、大陸なり南方へ派遣す  
る前の一時の仮配属という感じでした。そのため、たい  
した訓練もなく、次の命令を待つ毎日でした。

佐倉特有のからっ風が吹き始めた十二月も押しせまっ  
たある日、村松から転属になった全員に集合命令があり  
ました。

村松当時の元中隊ごとに二列横隊に並び点呼がありま  
した。

「奇数の者二歩前へ」

奇数が満州、偶数が南方とのことで、三か月苦勞を共に  
して来た戦友とそこでお別れで、命令の非情さがはじめ  
て身にしみました。

それから軍隊生活中、命令の非情と残酷を痛いほど知  
りました。私は南方でしたが、フィリピンなのかジャワ

なかわからず不安の毎日でした。門司で最後の夜を過  
ごした時はさすがに感無量で、生きてふたたび日本の土  
を踏めるのかとの思いが一瞬よぎったことも事実です。

馬と一緒に数千人の兵が貨物船に乗り、船団を組み南  
へ南へと進みました。勿論交替で対空、対潜監視です。

高雄で二泊中、十銭、二十銭をかごにいれ舷側からお  
ろし、バナナやパイヤ等と交換した愉快な思い出もあ  
ります。

高雄を出港してはじめて廣東に上陸するということを  
聞かされました。

黄埔に上陸、廣東の出水隊の門をくぐったのが忘れも  
しない一月一日です。早速お餅の馳走になり、あらかじ  
めきめられた各中隊に配属になった。私は第四中隊の第  
三小隊の山崎隊です。そこで佐倉から同行した見習士官  
にみっちり教育を受けました。

廣東の一年は二年後の広西の戦闘にくらべると夢のよ  
うな生活です。日曜日ごとの外出はあるし、しかも香港  
の押収品がまだまだ豊富で、内地生活とは比較になりま  
せん。

一か月ぐらいたったころ、大隊本部に配属の命令が出た、何人かの同年兵と珠江の海珠橋そばの大隊本部に移りました。

—大隊本部と一般中隊の違いはどんなところですか。

そうですね。一般中隊は戦闘單位に編成されたたかうことが主眼で、すべての行動・目的がそれに集結されています。大隊本部は四個中隊と砲隊を統轄し、あわせて旅団本部と連絡するところです。

—勤務は中隊と比較すると案でしょう。

一般の人はよくそういわれますが、我々兵隊は同じです。階級の差は厳然とあるし、古兵・初年兵の差は依然としてありますよ。残念ながら我々「九次補充」の兵は敗戦で復員するまで初年兵扱いでした。後統の初年兵はこないし、たまに補充の初年兵がきても四十歳近くで役に立ちません。それでも広東駐屯中は公用外出などもありました、作戦になれば本部も中隊もありません。かって大隊長以下幹部の苦労は大変だったでしょう。

—どんな作戦に参加されましたか。

広東周辺の小さな討伐は中隊單位ですが、なんといっ

ても脳裏を離れないのは湘桂作戦については本が何十冊も市販されていますし、語り継がれてもいます。私個人の体験したこと感じたことを中心にお話ししよう。

その前に節兵団が湘桂作戦に参加するのであらたに直兵団が新設され独歩六六大隊から一個中隊が選抜編成されました。転属の常として初年兵が主体に選ばれ、またしても「九次」の兵隊でした。多くの同年兵と生き別れでした。なかには死に別れになった者も何人かいます。

直兵団は広東周辺の警備なので、比較的戦闘は少なかったと聞きましたが、十九年八月浪網沙の戦闘で中隊長以下二十人前後の將兵が戦死したことを風の便りで知りました。勿論、同年兵も何人かいたでしょうが、くわしいことは、敗戦後知ったのです。

—確か江門から大作戦に参加したのですね。

そうですね。江門—三埠—梧州—貴県—大灣までは比較的順調で疾風迅雷とまではいきませんがまああでした。梧州までは西江沿岸も確保してあり、広東からたまたまに弾薬、医療、日用雜貨、慰問品の補充があり、各中隊

に配分できることは大きな喜びであり得意でもありません。しかし、広西省にはいってからはいけません。各中隊ごとの現地調達です。日本軍の通貨として儲備券がありました。奥地でもあり、儲備券自体に信用がなく、むりやりの押しつけで、米、野菜等と交換するのですが、ていどのいい徴発です。

中隊によっては武力偵察の名もとの徴発で、略奪とかわりありません。さいわい大隊本部には旅団本部から最低の給与の支給があったので助かりました。第一線は本当に大変だったと思います。一個中隊で日本の郡ぐらしい地域の警備ですから、中隊は小隊の、大隊は中隊の掌握がだんだんむづかしくなりました。

— いよいよ奥地からの部隊の收容作戦が始まるのですね。

そうですね。一番困難な撤収作戦です。第十一軍のしんがり軍が独立歩兵第六十六大隊です。各中隊は戦術上の要点を確保するため死闘の連日です。

牛岩壠、百朋街、大鳥山、羅漢山、大溶江口等の要地

の争奪戦が連日繰り返され

「○○中隊長戦死。○○中尉貫通銃創」

等の悲報を大隊本部の無線が受信する。下士官、兵の死傷はどれくらいかとあんなたる気持と、大隊はここで全滅かとひそかな覚悟をしました。

なにしろ敵は蒋介石の虎の子の部隊である。このうえ米軍の飛行機からパラシュートで武器、弾薬、食糧品の補給が無制限にある。それに反し、各中隊は携帯の武器、弾薬だけだ。

夜、星一つない闇のなかを本部下士官が各中隊を激励と連絡にまわったが、将校、兵とも髭面で頬はこけ、あと何日持ちこたえられのかと思いました。とぼとぼ帰る道の淋しいこと。

— 柳州、桂林と撤収し、全県の反撃で八月十五日を迎えたわけですね。

そうですね。その時私は公用で衝陽へ給料と慰問袋の受領に行き、全県で各中隊に配分したが、徴用した軍夫がその儲備券で炊事をしていたのが今でも眼に焼きついています。日本は破れたのだなあという実感を肌で感じま

した。

それから漢口郊外の郭長寿で一年近く抑留生活を送り復員しました。

## 鯨隠密挺進隊苦心懷古録

香川県 山地 豊重

私は昭和十二年度徴集です。昭和十七年七月香川県の丸龜歩兵第十二連隊へ補充兵として応召入隊しました。約一週間で坂出港より輸送船に乗船し、上海へ上陸しました。中支派遣第十一軍鯨第四十師団歩兵第二百三十四連隊第二大隊第二機関銃中隊の要員としてです。

私が応召入隊した当時の家庭の狀態は

父 死亡（昭和十二年）

母 健在

兄 健在（未入隊）

弟 健在（未入隊）

姉 健在（二人内一人は結婚済）

妹 健在（三人）

職業は農業でしたが、私は運送業（馬車曳き）で、独身で兄も未入隊で一町歩の田を耕しており、私はあまり後顧のうれいなく入隊できました。私の同年兵はほとんど昭和十三年一月十日より五月までに入隊していたので、ぎゃくに私は当時おい目をかんにておりまた。

昭和十三年八月に第一回目の簡閲点呼があった、私はその六月に盲腸の手術をして腹膜炎にかかっていたので、点呼には本人はいかず、診断書をだしました。そんなわけで私は当時の世情から国民として応召を心待ちにしていたのです。

徴兵検査より入隊まで五、六年の間に運送の商売でもうけておりました。

鯨師団要員として上海へ上陸後、船を乗りかえて揚子江をそ行し、約一週間で漢口へ着きました。昼間のみ航行し夜間は停泊する状態でした。漢口より渡船（サンパン）で武昌へ渡り、兵站で三日間過りました。さらに粵漢鉄道で鯨師団司令部のある咸寧へ到着し、ただちにトラック輸送で連隊本部の楠林橋へと進み、一泊もせず